

『キリンの子』

2016年03月17日

『キリンの子 鳥居歌集』が出版されている。「鳥居」というのは歌人である著者のペンネームである。学ぶことの象徴として、セーラー服を着て、短歌を詠んでいるが、本名は秘している。20代の女性で、壮絶な半生を送ってきた。2歳の時、両親は離婚をした。小学校5年生の時、精神を病んでいた母親が目の前で自殺した。家族を失った訳である。児童養護学校に入るが、そこで虐待を受ける。施設を出てからホームレス生活を送る。自殺未遂をしている。義務教育を十分に受けてなかったが、短歌と出会い、創作することで学業への意欲を持ち、辞書を引きつつ新聞で文字を学び、独学で作歌を続けた。「東京新聞」などに取り上げられ、注目され、歌集を出すに至った。

本の帯には「美しい花は、泥の中に咲く」と書かれている。想像を超える体験をしながら、感情的な言葉を排し、自らを客体化する精神力には感嘆する。言葉の力を知った者の強さが表れ、生きることへの憧れを詠んでいる。歌を紹介しながら、感想を書き加えたい。

まず「キリン」であるが、二句ある。「目を伏せて空へのびゆくキリンの子 月の光はかあさんのいろ」、「虐げる人が居る家ならいつそ草原へ行こうキリンの背に乗り」。彼女は背が高く、足が長いキリンが好きなようである。キリンのように空に向かって伸び、その背に乗って草原を走ったらどんなに楽しく、自由であろうか。母子家庭であったが、「サインペンきゅっと鳴らして母さんが私のなまえを書き込む四月」という喜びもあった。現実には「夕飯を一人で片づける母の味方は誰ひとりいない家」、「泣いたってよかったはずだ母はただ人参を切るごぼうを洗う」であった。その母の自殺は「透明なシートは母の顔蓋（おお）い涙の粒ぼとぼと弾く」、「冷房をいちばん強くかけ母の遺体はすでに死体に移る」悲しみであった。家族を失い「昼休み『家族はみんな死んでん』と水を飲みつつクラスメイトに」と詠う。養護施設では「全裸にて踊れと囁す先輩に囲まれながら遠く窓を見る」、「理由なく殴られている理由なくトイレの床は硬く冷たい」と虐待される。「生まれたくなかったけどと包み込む左手首の白い傷痕」という自傷行為もあったようだ。そして自殺未遂もしている。「入水後に助けてくれた人たちは『寒い』と話す 夜の浜辺で」、「死にきれず蛍光灯を見つめおり動けないままエタノール嗅ぐ」。友だちの轢死自殺も「遮断機が上げれば既に友はなく見れば遠くに散った制服」と見ている。ここまで、自分と周りを客観的に見られるものだろうか。また「私ではない女の子がふいに来て同じ体の中に居座る」とも詠んでいる。歌人の山田航氏は「著者は短歌を選んだように見えて、実は逆に短歌に選ばれたのかもしれない」と言っている。

彼女は学びに飢えていた。「渡された本が読めずにルビふりを頼んだ 8日に貰いに来ます」、「慰めに『勉強など』と人は言う その勉強がしたかったのです」。社会のことも詠んでいる。「止むを得ず自衛のためと少しずつ戦車の向きがずらされていく」、「デモ隊にまぎれて進む女生徒がうすく引きゆく林檎の香り」。また「町角のポストのなかに隣り合うかなしい手紙やさしい手紙」と人間の関係性を見つめている。

「失われたる命へと捧げられそれでも春を祝す花たち」、「海越えて来るかがやきのひと粒の光源として春のみつばち」、「公園の樹や噴水や向日葵が届かざる空の高さを測る」。彼女は「春と空」が大好きで、春の命と空の無限の広がりを詠んだ歌は、泥の中に咲いた美しい花のような生命感に満ちている。『キリンの子』は、どんなに破れていようと、生きることを希求するように励ましてくれる歌集である。